〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (21)〉

「みんなでみんなをみる保育」考

― いずみナーサリーでの日々を回想する ―

佐治由美子

平成十九年度、私は、「お茶の水女子大学いずみナーサリー」の保育主任を大学講師と兼任で務めた。異例のことであったこの体験を、そのいきさつから振り返ってみよう。

前年度の秋のこと、前主任が家庭の事情で急遽辞任し、残りの半年間を常勤保育士の中で最も年功を積んでいる者が担任をしながら保育主任を務めた。しかし、いずみナーサリーは対外的な対応、特に見学の依頼が多く、また大学附属であるために出席しなければならない会議も多い。このような雑務を担任の仕事と並行してこなすのは厳しいという状況にあった。

その一方で、いずみナーサリーの規約『国立大学法人お茶の水女子大学保育所規則』では、保育主任は「保育士のうちから学長が委嘱する」と内部から選出されることが定められていた。この問題をどのように解決すべきか、幼保プロジェクトは保育士たちと共に頭を抱えることになった。

大学としては、当時外部から主任を入れることはできなかったが、大学教員が兼務する形であれば特に問題にはならなかった。ナーサリーとしては、現場に常駐する主任を求めていたものの、それはかな

わなかった。そこで、兼務という範囲内で幼保プロジェクトの講師が主任を務め、大学附属としての会議に代表として出席すること、必要に応じて対外的なことや保護者との対応をすること、そして毎日のミーティングにまとめ役として同席することなどが決められた。これは、ナーサリーにとっては新しい形の主任を試みることを意味し、私共にとっては思いがけない実験（アクションリサーチ）の機会を得ることになった。こうして、プロジェクト内の互選により、それまで観察者としてかかわってきていた私がその役に就くことになったのである。

幼保プロジェクトには三人の専属講師がおり、それぞれがカリキュラム改革を手掛けながら保育現場とのかかわりをもっている。大学と幼稚園とナーサリーが協働するという意味において三者がトライアングルを形成していくときに、保育主任という役割をとりながら大学とナーサリーの間をどのようにつないでいくことができるのか。私の模索はここから始まった。

駆け抜けるように過ごした一年間を私なりに振り返ってみると、それは大学とナーサリーがつながるためのパイプを太くする働きというより、そのトライアングルの一辺をていねいに磨いて澄んだ響きが奏でられるよう準備する働きであったように思う。

次に、着任後間もなく出合った保育観をめぐるやりとりについて考えたことを述べていく。

ナーサリーの保育方針をめぐる問い

新年度がスタートしてひと月ほどたったころ、保護者会の準備を進めていく中で保護者に示す保育方針を定めるという話になった。まず、この時点で私には疑問が生じた。

ナーサリーの歴史は、確かに浅い。百三十年以上

の歴史を重ねる隣の附属幼稚園に比べると、生まれたばかりという短さである。しかし、「いずみ保育所」時代から創りあげてきた五年間という歩みがある。その中で編み出された保育には、保育士たちが経験的に共有してきた独自の指針がすでにあるはずだと私は思った。それは、平成十八年度に作られたパンフレット（メッセージブック）において具体的に公表されてもいたが、それでもまだ充分に言語化されていない部分があり、そのことを一緒に明らかにしていくことが私の果たすべき役割ではないかと考えた。そこで私は「これまでどんなことを大切にして保育をしてきたのか」と、保育士たちに問い直してみた。すると、「みんなでみんなをみる保育」という答えが返ってきたのである。

平成十四年に十名の利用者が登録をしてスタートした「いずみ保育所」が、「いずみナーサリー」に衣替えした平成十七年以降少しずつ利用者を増やし、平成十九年度末には二十六名の乳幼児が定期的に通う場となった。ところが、就学・就労する女性の支援を目指す学内保育所であるため、保護者にとって利用しやすいフレキシブルな時間及び曜日対応をしている。二十六名の在籍といえども実質は日々十名前後が入れ替わり立ち替わり集うという形で、集団の小ささは変わらないままなのである。したがって、このような小規模園であるからこそ保育士がみんなで子どもたちをみていくことができる。また、子どもたちも、どの保育士にも親しみをもっ

て安心して過ごすことができるという考えを基盤にして、「みんなでみんなをみる保育」の実現を目指してきたということであった。

また、いずみナーサリーのデーリー・プログラムからも、このことは考えられていた。〇～一歳児と一～二歳児の二クラスに分かれて一日をスタートするが、朝の登園時間がまだ担任の出勤時間でない場合もある。子どもが預けられるときに不安が少なくなるように、担任ではない保育士もクラスを超えて子どもたちと関係づくりをしておく必要があった。そして、午前中は年齢別の活動が中心になるが午睡後の活動は広い保育室を異年齢混合で過ごすので、保育士も自然にクラスを超えたかかわりができるようになっている。

私は、これまで大切にされてきた保育を共に体験しながら私なりに課題として考えていきたいと思い、「みんなでみんなをみる保育」を現状として行っていることを保護者会でお伝えすることにした。こうして、新年度の歩みは滑りだしたのである。

みんなでみるのは？

「みんなでみんなをみる」とは、子どもの何をみることなのだろうか？　私は、保育士一人ひとりの保育を見つつ話を聞く機会をもっていった。保育士たちの中には、保育の場では幼い時期から徐々に集団へ適応していくことが大切だという考えや、個の生活を大切にしつつ集団の楽しさも体験してほしいという考えなど、いろいろな保育観が混じり合っているようであった。

ここで、個と集団のかかわりについて考えてみることにしよう。二歳を過ぎるころから、子どもたちは保育者に密着した遊びに満足すると、そこを起点として動きによる空間的な広がりを見せたり、そこで新たに出会った人たちとさらなる遊びの展開を始

めたりする。この流れは、個から集団への移行のプロセスととらえることもできるが、ここでは子どもの内面に即した見方をしていきたい。三月のある日の保育を、記録から抜粋して考えていくことにする。

Ｈ（三歳男児）、Ｌ（二歳八か月女児）、Ｙ（三歳男児）、Ｅ（二歳四か月男児）の四人は、保育士ＫとＳ（筆者）の二人と一緒に粘土でお弁当のおかず作りを始める。間もなくＹとＥは粘土のコーナーを離れてそれぞれに電車で遊んだりまた戻ったりしている。おかずの数も増えてきたので、保育士Ｋがおままごとのお弁当箱をもってくると、Ｌはていねいに詰め始める。すると、Ｅは小皿を取りに行き粘土のミートボールを並べて「いらっしゃいませ～」とテーブルの周りを歩きだしたので「一つください」と声をかけると「どうぞ～」と新たな遊びが展開する。その傍らで、おかずを詰め終えたＬがお弁当箱を手に持ってうれしそうに歩いている。おままごとコーナーではＹが茶色の粘土をお鍋に入れてかき混ぜている。そこへ移動してきたＨが粘土で作ってもらったゆで卵を「これ切るの」と言うので、Ｓがまな板と包丁を用意すると小さな卵を細かく切り分けている。「小さく切るの、上手ね」と声をかけると「みんなに分けてあげるの」という言葉が返ってくる。

小麦粉粘土遊びに満足したＨは、遊びの最後に「みんなに分けて」あげようとしている。二歳になると、みんなで一緒にやりたい思いが表現される遊びはたびたび見られる。個々の思いが保育士にていねいに受け止められその子の存在が確かなものになると、子どもは自ら周囲に目を向け子ども同士の関係へと向かっていく。が、子ども同士の関係は必ず

しもうまくいかない。そこで、保育士との関係に戻ったり、その場で保育士の助けを必要としたりする。このように多様な関係の中を行ったり来たりする往復運動が、この時期の子どもたちの発達の姿でもある。この動きを子どもが自在にダイナミックにできるような保育の形態こそ、子どもの発達を保障し得ると私は考える。「みんなでみる」のは、子どものみんなであり、また一人ひとりでもある。一人ひとりの顔の見えるみんなを考えていきたいものである。保育士が個と集団の関係を柔軟に考えていくためには、保育士同士の連携が欠かせないと思う。それも、保育士一人ひとりが生かされる連携でなければ、保育そのものが生きたものになっていかないように思うのである。

この日の午睡明け、Hは目を開けるとボンヤリとした表情で保育士Kに向かって「お弁当楽しかったねぇ」と言ったという。子どもたちは、大人の考える個とか集団という枠組みにとらわれることなく、いつでも他者と生きることを楽しもうとする人たちなのである。

平成二十年度よりいずみナーサリーには新しい主任が着任している。内部から選ばれる保育主任ではなく、主任保育士として外部から迎えている。常駐の主任でなければ対応しきれない問題が保育の場にあることを、大学に認められてのことである。「みんなでみんなをみる保育」という課題も、こうしてまた新たな局面が開かれようとしている。

（お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師）

参考文献

刑部育子
『ナーサリーパンフレットのデザインプロセスを通した協働的学び』 日本保育学会第六十回大会発表論文集、三百四十八～三百四十九頁（二〇〇七）